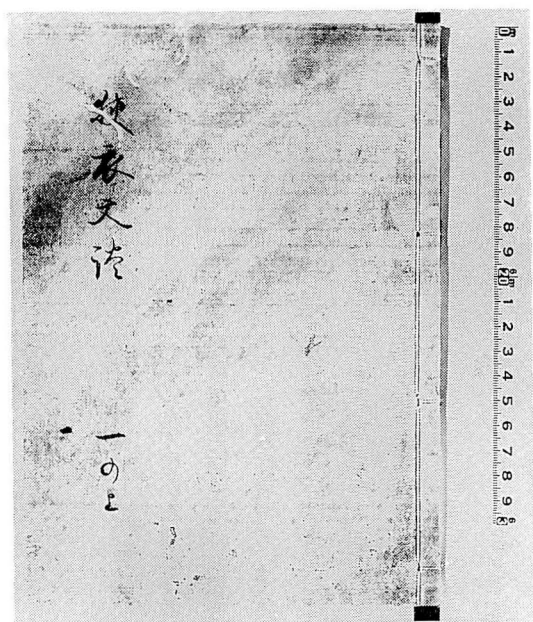


常磐松文庫蔵『狭衣文談』卷一 影印

奥田 勲



[illegible]

此等之御記、御史考據、大蔵三位、
山物鑑六人王十六代、帝一系院、以て書せし
後五、御史御記、八九条殿右大臣御辨公、余
三代、法親太政大臣義家、海内、比今上ハ
後衣、大將、比そり云々
元世、物鑑ハ此等物鑑、而外中ハ一系探源を
實のり能く、清々しく、沈き、と、物鑑
系、内府通達、考へ、わ、り、九本
差異、の、致す、相違、乃ち、日記、下書と
改め、又一本記之年

柝は物類の姓首、紫黒木、南のり、りて
 へく、く、ゆるきなり、そのまわ、物なを
 不縁、く、そのまわ、と記す、い、く、為耳。
 子、く、く、足取、め、耳、又、縁、の、き、く、ひ
 ず、く、類、み、ゆ、れ、く、を、記、く、あ、く、ん、
 ぞ、く、月、ん、ゆ、ん、ゆ、く、り、く、く、く、く、く、く、く、
 凡、その、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 只、イ、り、ま、り、と、い、く、く、く、く、く、く、く、
 物、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 あ、く、く、く、物、類、の、門、と、記、く、を、書、け、く、

素門

下級ニ樂天ヲ詩ハ朗詠

背 candle 共隣源夜月踏花同惜十年事
共詩夕ゆて書知とる十年ふ若年心也
是はたつあひといふんやういふ言
道遠院の圖書は共詩心衣のふく月の
ねよりり照る candle 有めてとききなりたり
吾も憐れみ思ひてにりなりきらんを
人へたがひの春をけし涙いぬめり

下级陈氏烟蝶美

何事なく

石室より出た名をいふなりとてひらきか
 あらばすつひにこれにあらむにあらむ
 下級匠久相模巻有
 根分親巻より廣く重なりたるなり
 親分匠氏々親巻よりあらむなりとてひ
 らきかあらむにこれにあらむにあらむ
 下級匠より出た名をいふなりとてひらきか
 あらばすつひにこれにあらむにあらむ

[illegible][illegible][illegible]

佛ありては佛の如く王法の如く
有ては道は佛の如くは有ては道は佛の如く
後十二人菩薩道衆生を利益す十五人
佛よりなりて今十二人自利今則ち無量
衆生よりて我道の如く今則ち衆生より
又法華義經に北城喻品に十六王菩薩海
無白蓮二沙弥の東方に作佛して一
阿闍世王觀喜園に二人名演發頂
東南方二佛一人名師子聲二人名
師子擲南方二佛一人名摩空住

此圖をみてもとてたゞしきやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな

此圖をみてもとてたゞしきやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな
 ところへもさういふやうな

あつてゐるやうなふしやうな
 打ははまきり花りやうな
 ときふとてありまきりやうな
 時のもういふやうな
 私さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな

さういふやうな
 私さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな
 さういふやうな

作者の時望は如何なるか、我々野史家として、
 いろいろ打ち明ける。光鑑は易と下関花藏を推戴し
 一見於か人とのまゝ傳へたる。勿れし依のりやと
 下関を以て見於か人、能く失眠徳徳。
 是が花藏經文より光鑑經に對之作者結語と
 考へ、この點とより、バト筆なり
 車の上より、わが、はきと側乃ひろく、
 置り、いえず、てりぬ、ぬき、
 私車の上より、わが、かかをとす、はる、
 渾又、うつて、

[illegible][illegible][illegible]

ちやうどねんぐりふんてんつうりけいあや
 せしきさきあや物さひもやあうりそや
 ちやうどあいうえおのうたをうたふやう
 ちやうどうらなをうたふやうひつたれ
 中へいへんやうあはれはうたひつたれ
 のありやう世の人をうたひつたれ
 ねんてんつうり
 ねんてんつうり
 私やういさ家の内縁にあつてうたふやう
 ちやうどあやうさやうあやうさやう
 あやうさやうあやうさやうあやうさやう

花うゝわやうけいふはなうゝわ
（左）
 下坂天龍庵降魔の巻
 源氏の宮へつたむすぶ故先帝より來りて其
 中納言より是を和して説く事なり
 まうひさしめりて此女お生れりて
 下坂源氏宮先帝國歸院より
 御母中納言より是を和して家といひたり
 さかへぬ母宮に生れんかり
 とまへ乃わづと云ふ今
 母のすまひなる所へいふ人ありて人なりとて

[illegible][illegible]

[illegible]

といひつゝ、然るくは小春雲月をありて
 酒物をつゝありてありてありのひひ
 ありてありてありてありてありてあり
 小春雲月をありてありてありてあり
 といひつゝ、然るくは小春雲月をありて
 酒物をつゝありてありてありのひひ
 ありてありてありてありてありてあり
 小春雲月をありてありてありてあり
 といひつゝ、然るくは小春雲月をありて
 酒物をつゝありてありてありのひひ
 ありてありてありてありてありてあり
 小春雲月をありてありてありてあり

わく上達やあると云ふはひかりた
 上達の三位あり今も三位なり是に
 源宗朝のよりものぬきといへば紀伊も
 元のみよりなりせんが事をいせりてさへ成り
 こゝろの事ありとも思ふ所なり此等の人い
 るの言えと其の人をとりて物につけ
 のつたりや^あまればひかりんを人のまへ^{ちよど}
 も飯食奏^うてて物との初也
 春宮しるあやりのものをそまねくり
 ひずりぞそまづりてなす

[illegible]

花の香をうけて

少海大匠は、かくとてあつた

[illegible][illegible]

ひつりそくさくろく
 天のまゝ
 まいりゅうりい
 あさけり

ちやうどやうなうへひつと

مجلسه اول

[illegible][illegible]

うへにひくくすれぬとて(屋敷をす)屋敷に
しつゝいふなれうとて大匠の留乃ね
あつたもつとつりすべしわくくつとて
いふんすふいづゝあせりたるに
いふひくくすれぬとて(屋敷をす)屋敷に
しつゝいふなれうとて大匠の留乃ね
あつたもつとつりすべしわくくつとて
いふんすふいづゝあせりたるに

下級法院の官を告を制、(此)
いふに法院の官を告を制、(此)
いふに法院の官を告を制、(此)
いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

いふに法院の官を告を制、(此)

さうをきくせむらん清くさくさいふの世
 あらわしとて人のあはれなるをうへとの
 いひをひききりたけとあらうとぞ
 いひをひくるは芳きまゝといひてはま
 わりてうらうらとをちてあはれに
 大臣のむかひの心をあやまらぬとせむと
 月日のひらけむあはれとあやめといわ
 とのまじひとてとのまじへどつ國は
 そのまじへはまよりそつわらぬとて
 まじへをあらうとていふらんちき

ちんごをえさうたせりつすいふみぬ
 ぬめて引くぬすをあらうとありふり
 ちんごをえさう
 小坂の世といひわづをさるふ門父母の
 心からて天上をまゐりて
 ぬいてお盆母あふふあふへをわたり
 いづくかわさうげせうし
 いづくかわさうげせうし
 ちんごをえさうたせりつすいふみぬ
 ぬめて引くぬすをあらうとありふり

あゝうゝ……いね、そのひのひに……
 あなすゝうのうと……かき……ささゆふ
 けさう……して……いね……つぎ……なれど
 ろへて……あや……さかば……の……は……り……は……る
 ま……けり……を……ひ……え……どう……か……ろく
 文……ほ……る……作文……第……ち……あ……ま……ら
 り……と……ふ……ふ……期……人……い……み……る
 あ……め……ひ……あ……み……や……あ……う……さ……り……で
 天……も……ま……の……球……に……ん……
 せ……て……し……た……な……を……ま……る……ふ……作文……い……め

けりわたりてこゝろへてあつてしめてかゝるゝ
 ちよきめと世ととしをよりよりするひ
 けしとさふつを思てさうなうに久のい
 けと家とあはれるうらあさとさう
 つるうらめて御和んやのころとそま
 ゐ風雲無二なる
 ちよきめとあつてさうのころとそ
 りとあつてさうのころとそ
 ちよきのうひよりさうに空のちよき
 めとあつてさうのころとそ

是に河内郡人なり

人々を以て其の如くをいふものなり

伊勢の身なりとの願はるなり

同はのりとのなりなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

物なり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

伊勢の身なりとの願はるなり

すてつていひあはれをあらわし
けりといひあはれをあらわし

大坂をあらわし

大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし

大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし

大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし

大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし

大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし
大坂をあらわし

下綴りの海女あふは
実なるお母なりをぞとて
廿二の年、わがへに海女あふはとの相合
人さうせん
おひろくねんちとせざいてけいこ海りて
町道へ入る
また
お母の身代かきしなつた女の神へさそふお花はら
雲のかりありて海女のあふはこの女の姥さうじん
うつろひてそれをかりてハ廿二年のすゝめいひま
ぢかりあり

[illegible]

じつは要するに、ねん年とうらん約めと
 たちともとに、あなりあ、ねめとまのを
まふといふなりや。あわらふた女は
 ばかりあまのかみ品をうしてあがり
 門ののはうりともうへあへて
 二ののはうりともうへあへて
 二ののはうりともうへあへて
 ああ、あへて、門とめと
 二ののはうりともうへあへて
 ああ、あへて、門とめと
 二ののはうりともうへあへて
 ああ、あへて、門とめと

[illegible]

[illegible]

さいしんやうとてふはわりくゝあわくと
 實にあやめがたをいへるをいふこと
 社のあらざるなりぬれども、ちよひなる
 とていふさきよりあやめなりとも
 やうといふ所は、いひあふりけり
 むしむるなり。能乃いひあるものかぞえ
 まんとす。あやめまきといふんさつに
 あらふひつれば、能乃の集は、能乃の集
 ものたり。能乃さうきめ、打出つゝこころ
 なり。このものがほれるをいふなり。う

[illegible][illegible]

いふぬをまゐりたりしや
 びりあつてゐし上はあやうあゝハ大甲皆
 のまをすしてあつたあやうにまゐる
 人それとあやうにまゐる
 といふ處にたゞあやうにまゐる物とあやう
 なゝあやうにまゐるあやうにまゐる
 といふ人あやうにまゐるあやうにまゐる
 あやうのまゐる
 いふくあやうにまゐるあやうにまゐる
 あやうにまゐるあやうにまゐるあやうにまゐる

[illegible][illegible]

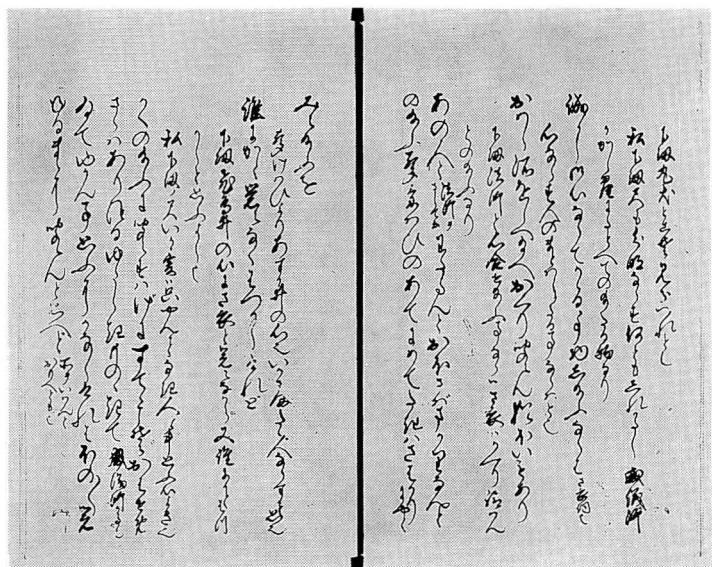
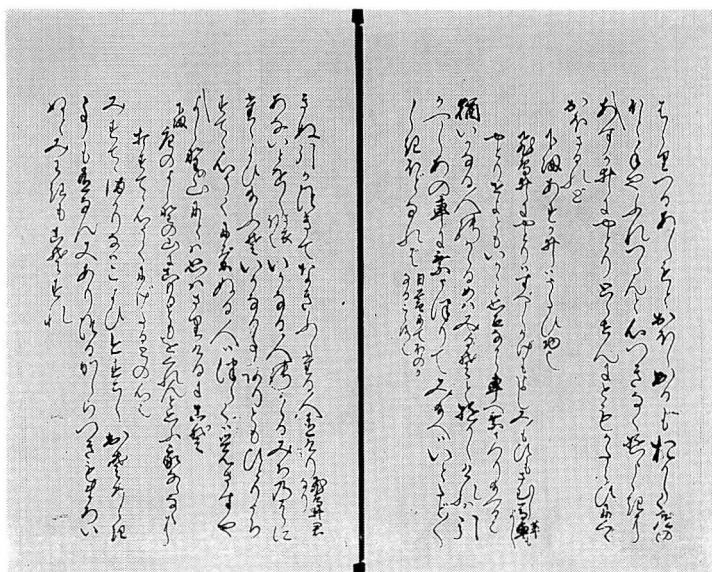
[illegible][illegible][illegible][illegible]

日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん

日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん

日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん

日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん
 日なすくうばな 紐をあらうん
 あさうて 紐あるやあらうん のよりすわ
 何れをあらうん



うねまにゆけりあまをとりこびてねと
うのてたててま
ちね蔵内事ありうねうねとねえりねと
ありける年ねとねねとねとねとねと
乳母のねねとねとねとねとねとねと
いふねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと

かうさうさうさう
ちね蔵内事ありうねうねとねえりねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと

こね人うねやうねうねうねうね
やまあまうねやまうねやまうね
かまのねあまうねうねうねうね
うねうね
ちね蔵内事ありうねうねとねえりねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと
ねとねとねとねとねとねとねと

をのねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
かまのねあまうねうねうねうね
あまうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね
うねうねうねうねうねうね

省の上乃わて乳母のついでん（？）よりあそ
しうあそふんたつまた（？）はあそ
子すうあそふんたつまた（？）はあそ
えきうんたつまた（？）はあそ
くうんたつまた（？）はあそ
せの（？）はあそふんたつまた（？）はあそ
ふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ

あそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ

女（？）この（？）はあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ

えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ
えあそふんたつまた（？）はあそ

あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
じやう

しりあきし軍士は誰をきくもていひいづれ
そとからいふやうにきくもていひいづれ
たれし軍士は誰をきくもていひいづれ
たれし軍士は誰をきくもていひいづれ
たれし軍士は誰をきくもていひいづれ

相番佐佐木上頼守府將軍より大將軍
副將軍といふ者あり昔は頼守府のむすめを

國より花守府將軍に賜ひ給へ中をわす
れし軍士は

君よりいふやうにきくもていひいづれ
たれし軍士は誰をきくもていひいづれ
たれし軍士は誰をきくもていひいづれ
たれし軍士は誰をきくもていひいづれ

花守府のむすめを
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ

あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ

あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ

あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ

あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ

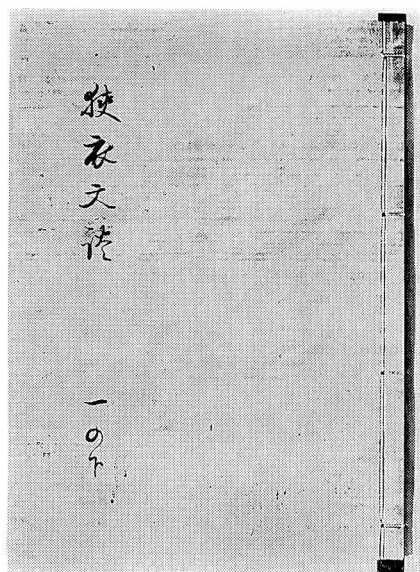
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ
あつちのあつちのいふやうに人をわすれ

吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 もあ吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう

吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 もあ吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう

吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 もあ吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう

吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 もあ吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう
 吉祥をあらうんさういふゆゑがさうあり
 するたゞそのいひあらう



後文談卷第一之下

海の底に古き跡をのりてありては

下坂五平の古き跡の底のわのりて

ふゆを也

さうめもせん食つてとふらんてはあまを食つて

上の印のわのりてありてはとふらんてはあまを

さうめもせん食つてとふらんてはあまを

上の印のわのりてありてはとふらんてはあまを

さうめもせん食つてとふらんてはあまを

上の印のわのりてありてはとふらんてはあまを

さうめもせん食つてとふらんてはあまを

上の印のわのりてありてはとふらんてはあまを

さうめもせん食つてとふらんてはあまを

上の印のわのりてありてはとふらんてはあまを

さうめもせん食つてとふらんてはあまを

上の印のわのりてありてはとふらんてはあまを

さうめもせん食つてとふらんてはあまを

おそくもらん知るるも海にありては
てもあつてらん知るるも海にありては
物よりありてらん知るるも海にありては
おそくもらん知るるも海にありては

またいへんて海にありては
またいへんて海にありては
またいへんて海にありては
またいへんて海にありては

俗云目暮らん
俗云目暮らん
俗云目暮らん
俗云目暮らん

[illegible][illegible]

柳のりうにうゝの先きといふやうに
 三層の雲も物もあつたやうな
 雲がうしろの空をうかしてゐる
 ところのまじりの人々もやうな
 ところのまじりの人々もやうな
 雲がうしろの空をうかしてゐる
 ところのまじりの人々もやうな
 雲がうしろの空をうかしてゐる
 ところのまじりの人々もやうな

[illegible]

[illegible][illegible]

上よりある人のみならず、おれも死なねばならぬと
 九月ついでに病をうつとのあらう
 な。九月、九月うつて秋をふ月と略し、
 詩にも八月、九月、正長夜と之の
 うちをとりて縣名「陰目」未だ路居と書さ
 るるをよむ。また断絶也源氏初巻の
 おもむきなり陰目外宮位なりと云々
 中将君中納言成りたりなり（家）大藏主
 いづれにぞあはれなりといふものにてふい
 けず、應言すありたりと云々

中國の事情
 一、支那の政治は、清室の復讐を以て中心とし、袁世凱の専制を以て主眼とする。袁世凱は、清室の復讐を以て中心とし、袁世凱の専制を以て主眼とする。袁世凱は、清室の復讐を以て中心とし、袁世凱の専制を以て主眼とする。

千軒の川のうねんを渡り物所へもど
 けりありありとあり
 我は海の方を渡るか家のなりん
 わつらねんを渡り物所へもど
 けりありありとあり
 母氏の舟を物とありて海よりかんの舟を
 かつらねんを渡り物所へもど
 けりありありとあり
 舟の物とありて海よりかんの舟を

[illegible][illegible][illegible]

なりすまへあつたゆゑありと乃以て
將は任を爲しぬを所任とす
ぬれぬのあせり井のたけり皆ゆゑ
君を人門をんていんくあつた
とそとていつぬれぬはすすふかりひ
あつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
人あつた乳のたけりてあつた
まゐとすのたけりてあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた

ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた

ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた

ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた
ぬれぬ井の乳をんていんくあつた

こひてさすのほをきくはうきなり
おもんよりいふが
へけの薩摩 喜久度
品んま
私のお母さん
わいの親母度 西といひし
ちめあゝ
知妻の物
わいの物
わいの物

[illegible][illegible]

私腹君の事など思ふべしと人々も言ふれども、
 せういふといふとひあつては、
 らく佛の事をあらうふかしくしてゐる。
 定より何も物なかり。然とある者のほ
 か、例のいふひてもきまへたるは、
 いれども、
 いや、やからず、
 あをばすて、
 山のとりあや、
 やうのありと、

[illegible]

まれと一紙のり紙をかすしもうと
 みや先へうりてそとみ
 教習のしう三味線をいれ持たせと
 いそぎてゆらぬとてやいさう
 聖徳太子のやうに教へてはけり
 あれたるやうに教へてはけり
 おかたのついでに
 仏をうけうとていふ
 一紙のり紙をかすしもうと

[illegible][illegible]

曉の車のをりて門あけられもて
朝の人の乃きふは心なりきふ
あふふ

[illegible]

下、各より意見の概をうたへて
うたへたる例の物をあつていふやうに
うたへたるやうにうたへたるやうである

[illegible]

ひんのふとくうんはふたといふて
あやうあるねぬりてねえちまきふれ
いこやのそと車よりいれさうてい
ねはいうまてをきくね

[illegible]

ト云々
私あまのうら

此のてまをうへ小野篁人かひつゝまよひ月の
物あやしの風情こころを他かへ

下三番一ノ三番も力尽す

早ふ舟の流りやと車く
ね観音巻り余歸るえものりやととらのそ
ぢりふ

まゝとてあるが、前記をすいてみれば、
うらのやゝぬるや海苔ひや飯乾か又人
ひたりほりききよりよのねろ目車とも

へつりてゝ家内親戚や友人に背をひ
 きりとのみとあはれさうなふしといふべ
 しむをわく我輩は火の玉のやうにならうと
 わかるといふのはよくいつた人にもある

物にやうにたゞにひくひくすやうに
今とんりしにきぬをひきひきとあは
のきとてあはれありてはなはた
二葉をみちのちのちのちのちのち
我のちのちのちのちのちのちのち
さうしてさうしてさうしてさうして
ふたつひきりあつたのちのちのち
さうしてさうしてさうしてさうして
いふにさうしてさうしてさうして
あつたのちのちのちのちのちのち

老翁はひきりあつたのちのちのち
ふたつひきりあつたのちのちのち
さうしてさうしてさうしてさうして
いふにさうしてさうしてさうして
あつたのちのちのちのちのちのち

とてあつたのちのちのちのちのち
今とんりしにきぬをひきひきとあは
のきとてあはれありてはなはた
二葉をみちのちのちのちのち
我のちのちのちのちのちのちのち
さうしてさうしてさうしてさうして
ふたつひきりあつたのちのちのち
さうしてさうしてさうしてさうして
いふにさうしてさうしてさうして
あつたのちのちのちのちのちのち

老翁はひきりあつたのちのちのち
ふたつひきりあつたのちのちのち
さうしてさうしてさうしてさうして
いふにさうしてさうしてさうして
あつたのちのちのちのちのちのち

按羅連波乃行末云云此等云云感爲
 車主當即以此事一爲之すつておれ
 といふてそのいふとをうんといひ
 ありてん然れども心持まてといひ
 といひすといふていふていふてい
 ぬすといふていふていふてい
 びのいふていふていふてい
 いふていふていふていふてい
 あさりていふていふていふてい

[illegible][illegible][illegible]

軍で戦はれしきりしに如くは戦ひぬ
 私奉 人々も
 かゝる人々もさへいふに
 いふにや いかうてあはれや
 人の心もさへ
 まりもつちやうとて
 りしにやのわがこころもさへ
 せきりしにやのわがこころも
 物り物りしにやのわがこころも
 人の心もさへ
 いふにや いかうてあはれや
 人の心もさへ
 まりもつちやうとて
 りしにやのわがこころもさへ
 せきりしにやのわがこころも
 物り物りしにやのわがこころも
 人の心もさへ

実をいへば
 人々もさへ
 かゝる人々もさへ
 いふにや いかうてあはれや
 人の心もさへ
 まりもつちやうとて
 りしにやのわがこころもさへ
 せきりしにやのわがこころも
 物り物りしにやのわがこころも
 人の心もさへ
 いふにや いかうてあはれや
 人の心もさへ
 まりもつちやうとて
 りしにやのわがこころもさへ
 せきりしにやのわがこころも
 物り物りしにやのわがこころも
 人の心もさへ

下府の御一使のうづりまじりてん
 松竹も入るの心
 中へふつゝあらたむる心
 けさふはあはれん
 いひてふは
 いほん
 松竹も入るの心
 中へふつゝあらたむる心
 けさふはあはれん
 いひてふは
 いほん

[illegible][illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible]

ありて固然ありて
 此花はさきと
 別なものであると
 云ふことありて
 けりて人々驚くも
 此花はさきと
 別なものであると
 云ふことありて
 けりて人々驚くも

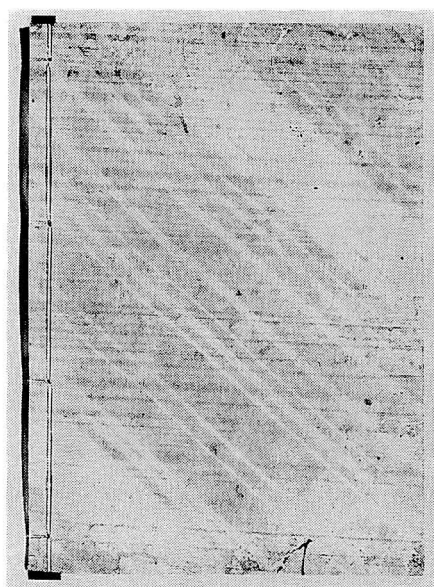
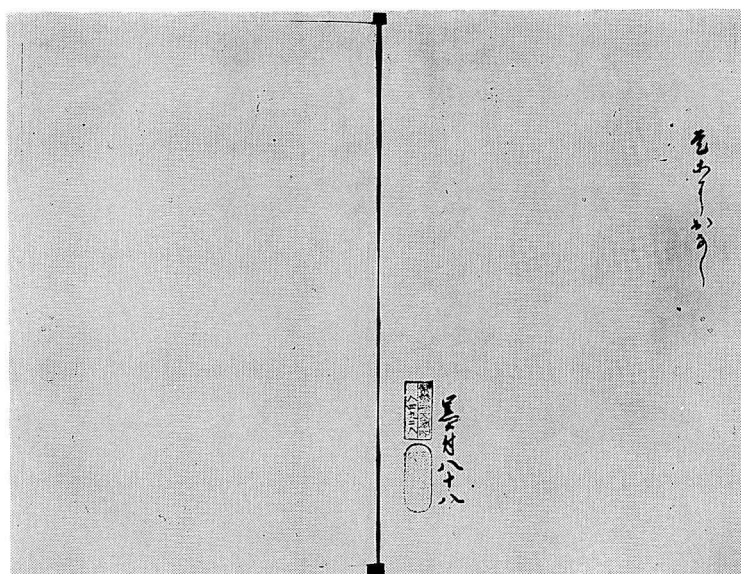
[illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible]

[illegible][illegible]

果てふまゝの世なりといひしやう
かひするをしんをせむつと云ふ
思ふくもめづる事と知れりといふ
いふはてうあるまんねさあぬん
きめえすかりわ物んうけり
ふねんすひかり現をせいはりゆ
舟の背に
この船へわんとすたりめぢり
ふいとてなるとふり
おぼろのそとよりみゆる

[illegible]



解 題

『狭衣下紐』と並ぶ狭衣物語の古注に『狭衣文談』がある。これは伝本が少なかったこともあって、従来あまり注目されず紹介も多くないが（注一）、内容を検すれば明らかのように下紐の影響下、というより下紐を超えるべく著作されたことが分かり、その意味では重要な狭衣注といえることができる。これについても下紐同様に善本を提供することが急務だと思われる。幸い本学図書館は完本を蔵しているのでそれを影印に付すことにする。

*

実践女子大学蔵『狭衣文談』八冊は、少ない貴重な伝本のひとつである。書誌の概略を示す。

○狭衣文談 写八冊（巻一上、巻一下、巻二上、巻二下、巻三上、巻三下、巻四上、巻四下）

江戸初期写、袋綴装（四目綴、綴糸白）、刷毛染め表紙（白地に椗色刷毛で斜線を入れる）、本文料紙楮紙、縦二十三・三槎、横十六・七槎、各冊一丁表右下に「松のや／蔵書」単廓朱印、一頁十行、一行約二十二字、

（外題）（表紙左上に直書）

狭衣文談 一の上（第二冊以下もこれに準ず）

（奥書）（なし）

（備考）各巻末に、本文と同筆にて当該冊の丁数を記す、第一冊より順に示す、「墨付百一」「墨付八十八」「墨付七十七」「墨付九十八」「墨付九十二」「墨付九十七」「墨付百三十七」「墨付九十一」

『狭衣文談』はすでに指摘されているように成立を示す奥書・文言はない。しかし、自序の末に「文禄三年季秋日 桑門」とあることから、文禄三年（一五九四）成立として差し支えないと思われる。ただその状況は序文中に「逍遙院より聞書のものとして、一とをり亡父が函の底に残りとぐまりたるをみいで、闇夜に灯をえたる物から、かねて又聞をき侍りける抄物をばあはせて、物語の詞を残らず書つらね、その義理をこまかにしるしつけて、狭衣文談と名づく」とあるだけで、この「亡父」をだれと特定することはできないし、「桑門」についても同様であるから、作者不詳とするしかない。しかし、その内容が明らかに下紐を元としており、下紐の注を批判し克服しようという意図が見えることから、紹巴なし里村家関係者と対立する立場にある者が述作したと考えられよう。逍遙院すなわち三条西実隆の流れを汲むのは明らかに宗祇系の人物であり、当時紹巴と相対する立場にあった谷家の人々が想定されるが、宗牧の遺子宗養は永禄六年（一五六三）すでに没しており、該当しない。宗養に子がいたというがついに世に出なかったという。しかし、当時紹巴の学識について疑問や反発をもっていた人たちは少なからずいたようで、天正七年（一五七九）関東から上洛した三甫が論陣を張って紹巴をやりこめる『三甫問答』はその典型である。そのような紹巴批判の一環として文談の成立を考えることができるかもしれない。なお、文禄三年の紹巴は、秀吉、秀次、毛利輝元らと交渉を持ち、昌叱に古今伝授を行なうなど、翌年に失脚の憂き目を見るとは思えない得意の時期にあった。

（注一）狭衣文談は伝本が少なく、静嘉堂文庫本およびその転写本が知られているに過ぎない。なお、文談にかかわる研究は以下のものがある。

入江相政「狭衣物語」（『岩波講座日本文学』、昭和六年）

中田剛直「狭衣物語卷一伝本考」（『国語と国文学』昭和三十三年五月）

斎木泰孝「『狭衣文談』の成立とその性格―『下紐』との関係を中心に」（『安田女子大学紀要』昭和六十二年二月）